



# 人喰い蛇男

作者 大黒達也

## 人喰い蛇男

『あらすじ』

人肉密売組織の長である邪鬼により、巨大なアナコンダの姿に改造された男が、美女達を丸呑みにして貪り喰らう。

『登場人物』

蛇男  
へびおとし

人肉密売組織の長である邪鬼により、巨大なアナコンダの姿に改造された男。美しい女の肉以外、食糧として受け付けられない意識を植え付けられていた。

神崎 美奈  
かんざき みな

警視庁に勤務する美人捜査官。清楚な容姿と緻密な頭脳の持ち主。蛇男による犯罪捜査を担当する。

有馬 ありま 結衣 ゆい

神崎美奈の後輩。エキゾチックな顔立ちでモデルといつても通用する美貌の持ち主。

飯沢 いざわ 花音 かおん

警視庁特殊部隊に所属する女性警官。神崎美奈の後輩であり、有馬結衣の同期生である。背が高く、抜群のスタイルと可憐な容貌を持つ美女。警視庁一のライフル射撃の名手。

『目次』

プロローグ

第一章 強姦魔

第二章 美女の踊り食い

第三章 新たなる獲物達

第四章 魔物

第五章 対決

エピローグ

『本編』

プロローグ

蛇男は、マンションの壁を雨どいに伝わりながら、ゆっくりと登って行く。全長が八メートル以上はあり、巨大蛇のアナコンダに酷似していた。数分で最上階のベランダに上がった。

ガラス戸に鍵は掛かっていなかった。口でガラス戸を開き、室内に侵入した。居間のソファに蜷局を巻いて、バスルームの方を見詰めた。

バスルームでは、二十歳くらいの女がシャワーを浴びていた。手足が長く美しい容姿を持っていた。

佐藤恵。都内の女子大に通う十九歳でミスキャンパスに選ばれるほどの美少女だ。

蛇男が鎌首を持ち上げ、バスルームの様子を窺った。それから床を這いバスルームに向かった。

洗面所に入り、恵が脱いだ下着に頭を埋め匂いを嗅いだ。香水の匂いに交じり、隠微な香りを嗅ぎつけた。

そのとき、バスルームのドアが開かれた。蛇男と恵の視線が合った。恵はガタガタと震え、その場に座り込んだ。股間から小水が流れ出した。



蛇男が長い舌を出しながら、恵に近付いて行く。

恵が口を開け、叫び出そうとした。蛇男の鎌首が恵の首に噛み付いた。恵の動きが一瞬で緩慢になり、すぐに全裸のまま、床に横たわった。虚ろな視線を宙に向けていた。毒牙から首筋に注入した少量の麻酔薬により、全身の自由を奪われたのだ。量が多ければ完全に意識を喪失していた。

蛇男は、恵の足首を啞え、居間に引きずっていく。フ  
ローリングの床に横たえ、近くに蝮局を巻き、極上の裸  
身を観察した。美しい肢体だった。シミひとつなく、雪  
のように白い素肌だ。

蛇男は堪らず、形の良い乳房を甘噛みした。柔らかく  
かつ弾力が有り素晴らしい感触だった。噛み裂きたい欲  
求を必死に耐えていた。鎌首が白い腹を下側に移動して  
ゆく。薄い陰毛が生えた下腹部に鼻を押し付けた。

鼻孔に石鹼の匂いに交じり、尿の匂いがした。少し前  
に失禁したばかりだからだ。

細長い舌を膣口に挿入し、内部を舐った。少し塩気の  
混じった得も言われぬ素晴らしい味だった。

少しの間、膣内の味を楽しんでから、鼻先を恵の背中  
に差し入れ、うつ伏せにひっくり返した。

シミひとつなく雪のように白い尻が蛇男の視線を貫い  
た。堪らず、尻の割れ目に鼻先を押し込んだ。舌でアヌ  
スを抉じ開け進入した。貪るようにアヌスを舐った。

恵の裸身を舌で楽しんだ後で、裸身に胴体を巻き付けて行く。全身に巻き付いてから、細長い男根が胴体から突き出して、膣口に侵入した。膣内は狭く、物凄い締め付けだった。胴体を振動させ、膣内を激しく刺激した。一分ももたなかった。逝く寸前で男根を抜き、天井に向けて白濁した精液を吐き出した。

激しい性欲が収まり、今度は凄まじいばかりの食欲が襲って来た。大口を開け、麻酔毒で全身の自由を奪われ



た恵の頭部を口で挟み込んだ。ゆっくりと頭部から呑み込んでいく。次に豊かな白い乳房を呑み込んだ。麻酔薬が切れたのか、上半身を呑み込まれた恵が暴れ出した。失禁し股間から尿を噴出させた。

蛇男は、構わず恵の裸身を呑み込んでいく。恵の白い裸身が口内で揺れ動いていた。素晴らしい舌触りだった。形の良い豊かな尻を呑み込む際には、興奮で脳が張り裂けそうになった。

10

で行く。

むっちりとした白い太腿を味合うようにして呑み込ん



少し前まで暴れていた恵は、呼吸困難で意識を失ったのか、今はまったく動かなくなっていた。

形の良い脹脛を呑み込み、最後はつま先を呑み込んだ。蛇男の胴体は、ひとりの女を呑み込んだせいで大きく膨れ上がっていた。

蛇男は満腹になり、激しい睡魔に襲われた。寝室に移動し、ベッドの上で蜷局を巻き、寝息を立て始めた。

翌朝、蛇男は、玄関チャイムのブザーで目を覚まされた。昨夜丸呑みした女は、消化途中だった。

重たい腹を引きずるように玄関に向かい、玄関チャイムの画像を覗いた。二十歳ぐらいの若い女が立っていた。手足が長くモデルのように美しい女だった。好みの容姿だった。

「恵。いないの？」

女は、玄関チャイムに話かけていた。

蛇男は、口で部屋のロックを外した。

「いるんじゃない。何で返事しないのよ……」

扉が開き、目と目が合った。女が驚愕の表情で叫び出

そうとした時、蛇男の両眼が赤く燃え上がった。

「俺の目を見ろ！」

都内にある警視庁内の一室では、女子大生連続疾走事件の対策会議が行われていた。

「警視正。行方不明者は、これで十名になりました」

末席に座っていた二十代前半に見える女性警察官が、最初に発言した。モデルといっても通用するような美女だ。セミロングの髪に上下白色のスーツを着ていた。

かんざき みな  
神崎美奈。警視庁きつての美人警官だ。年齢二十三歳。キャリア出身で今年警部に昇進したばかりだった。

「美奈君。事件性はあるのかね？単なる家出じゃないのか？」

警視正と呼ばれた総白髪で初老の男が、女性警察官に尋ねた。

12 「今回、捜索願が出された女性は二名です。二人ともマシジョンの監視カメラに入室する様子は撮影されていますが、部屋を出た画像は記録されていませんでした。しかも失踪者の部屋は十階で窓から外に出るのは、ほとん

ど不可能です」

「それで、何か手掛かりは掴めたのかね？」

「現場にこれが落ちていました。すべての行方不明者達の自宅で見つかっています」

美奈が手にしていたのは、蛇男の鱗だった。

「鑑識で何か調査結果は出たのかね？」

「形状は、爬虫類の鱗に酷似しており、材質は高強度セラミックという事です」

「人工物ということだね？ 仮に今回の一連の疾走事件が誘拐犯によるものだったとして、犯人が現場に落とすといった可能性はあるな」

警察署の署長であり、警視正の熱田聡が腕組をして言った。

「今回の疾走事件が誘拐犯によるものかどうか断定はできません。失踪者の自宅近くにある監視カメラには、何も映っていませんでした。ガイシャが自宅に入る映像は、あります。出て行った画像は無いのです」

「あり得ない。若い女性が煙のように消えてしまったという事か……」

## 第一章 強姦魔

一週間後、蛇男は、都心から数十キロ離れた森林地帯にある溪谷に潜んでいた。

都心から、トラックの荷台に乗り、移動してきた。移動は夜間だったので誰にも目撃されることは無かった。

近くには、温泉街があり、人通りもあった。

午後三時。雲一つない快晴で気温は二十度。温泉街を取り囲む山々は紅葉の盛りだった。

蛇男は、溪谷沿いにある大岩の上に蜷局を巻き、下を通る温泉宿の客達を観察していた。

不意に蛇男が鎌首を擡げた。二十歳位に見える若い女達の集団が通りかかったところだ。賑やかな会話も聞こえてきた。会話の内容から都内の大学に通う女子大生のようなであった。皆、整った容姿をしていた。ミニスカートから覗く白い太腿が艶めかしかった。蛇男は、大岩から溪谷の崖に移動し、木々の間を移動しながら女達の進む方向に移動していく。

女達は温泉街の端に位置する旅館に宿泊していた。蛇

男は彼女達が入り口に消えるのを確認してから、その宿の裏側に回った。そこには溪流沿いに露天風呂が作られていた。露天風呂は混浴で子供連れの夫婦が入浴をしていた。妻の方は、三十歳くらいで中肉中背であり、整った容姿と豊かな乳房を持っていた。一瞬、夫の前で妻の性器を舐め回し、レイプした後、丸呑みにする光景が脳裏を掠めた。

極上の裸身に対し、激しい性欲も食欲も感じたが、目的は女子大生達であったので、欲望を何とか押えつけた。

蛇男は、露天風呂の近くにある木陰に蜷局を巻き、宿と露天風呂の間にある石畳の通路をじっと見詰めていた。

十分くらいたった頃、若い女達の賑やかな声が聞こえてきた。先ほどの女子大生達が全裸で露天風呂に向かう様子が見えた。五人とも豊かな乳房や尻を持っていた。

先ほどまでいた家族連れの姿は消え、露天風呂には彼女達しかいなかった。

五人の女達は、湯に浸かりながら、世間話をしていた。

そのうち、ふたりが抱き合い、キスを始めた。

「やだ。恵理ったら、麻耶とできていたの？」

周りの女達が囁し立てた。

「いいじゃん。麻耶って可愛いだよ。愛情表現よ」

「それでオマ＊コに指入れる訳？」

別の女が湯から顔を出した。ふたりの下半身を見ていたのだ。

蛇男が木陰を出て、女達の方に向かった。背後から音を立てずに近付いた。五人のうち、ひとりだけ、少し離れた場所で湯に浸かっていた。蛇男はその女の背後から首筋に噛み付き、麻酔薬を注入した。一瞬で女は意識を失った。素早く女に胴体を巻き付け、露天風呂から引き揚げた。その間、数秒余り。仲間達とSEXの話で盛り上がった。他の女達には気付かれなかった。

蛇男は麻酔薬で意識を失った女の全身に胴体を巻き付け、露天風呂から運び出した。

溪流に入り、女に胴体を巻き付けたまま、人気のない上流に向かった。水温は低かったが、女の意識は戻らな

かった。

暫く進むと、川沿いに木造の小屋が見えた。周囲には硫黄臭が立ち込め、小屋の近くには広さ十畳程の天然露天風呂があった。

小屋は施錠されていなかった。今は使用されていないようで、内部にはゴミが散乱していた。小屋までに至る道路はなく、ここを訪れるのは登山客くらいだった。

蛇男は、女を小屋の外にある大岩の上に横たえ、十畳ほどの小屋内に散乱するゴミ類を口で外に運んだ。蛇男は以外にもきれいな好きであった。室内を片付け、まだ意識の戻らない女を胴体に巻き付け室内に横たえた。小屋に差し込む夕日が、美しい女の全身を照らし出していた。むっちりとした白い太腿の間に鼻ずらを差し込み、深呼吸をしてみた。若い女の少し隠微で素晴らしい匂いがした。このまま喰らってやろうかとも考えたが、今はさほど空腹では無かった。

この温泉街に来る途中で、トラックドライバーの運転手である三十歳位の女を食べていたからだ。

やっと消化が終わった頃だった。この娘は朝飯にしよう

と考え、胴体に軽く巻き付き、まだ早いのではあるが眠りにつくことにした。

その夜、十時を過ぎた頃に蛇男は目を覚ました。小屋の外に人の気配を感じたからだ。胴体を巻き付けた女はまだ、目を覚ましていなかった。

「ここは何だ？」

「嬉しい！小屋の外にあるのは天然の露天風呂よ」

「声が大きいぞ」

「いいじゃない。こんな山の中だし。小屋にも明かりは点いていないわ」

「どうやら、小屋の外にいるのは、男女二人のようだ。」

蛇男は眠り続ける女から離れ、空いていた窓から外に擦り抜けた。女は残しておいた。外の人間に気付かれずに女を運ぶのは困難だった。小屋の外に出て、二人に見つからないように窓の外から中を覗き込んだ。

蛇男が小屋の外に出て、入れ替わるようにふたりの男が入って来た。

「キヤー！人が寝ているわ」

「何だって！」

二人は恐る恐る床に全裸で横たわる女を懐中電灯で映し出した。

「若い女よ。何でか分からないけど裸で寝ているわ」

「凄く眩い姉ちゃんじゃないか。生きているのか？」

「息はあるわ」

三十代半ばくらいの登山服を着た女が、寝ている女子大生の口元に顔を寄せた。

「ラッキーだな。こんなところで別嬪さんを手に入れるなんて」

スキンヘッドでがっちりとした体格を持つ四十代位の男が、呻くように言った。二の腕には入れ墨が掘られていた。

「さっき、登山者の若い女を犯したばかりでしょう？」

「そういうお前だって、その女のマ\*コ舐めて喜んでいたらじゃないか」

「アタイはどっちも愛せるのよ」

女が背負っていたリュックを床に置いて、若い女の白い太腿を押し広げ鼻先を付けた。

「あんまり汗臭くないわね。若い女のエッチな匂いがす

るわ」

「俺にも嗅がせろよ」

「ちよっと待ってよ。この娘を抱いてからどうするつもり？」

「どうするたって、決まっているじゃないか。一人殺すのも二人殺すのも一緒だぜ」

「コンビニのバイトを入れたら三人でしょう？強盗だけでなく、バイトの娘を攫って山の中で散々犯して絞殺したじゃない」

「あの娘も最高だったな。お前だって散々弄んだらう？どうせ、捕まったら死刑だ。生きているうちにやりたいことはすべてやる」

男も背負っていたリュックを置いた。リュックから電池式のカンテラを取り出してスイッチを押した。室内が明るく照らし出された。女を押し退け、白い太腿を押し広げ音を立てて舐り始めた。

すると意識を失っていた女が目覚めた。

「何？キヤー！」

女が自分の股間を舐めている男の髪を掴んで絶叫した。

「痛いじゃねえか！このアマ！」

男は凄んで見せてから、リュックの中から黒光りする拳銃を取り出した。

拳銃の銃口で女の頬を軽く叩いた。

「こいつは凶暴なのよ。若い女を二人も絞め殺しているんだから」

近くで二人の様子を食い入るように見詰めていた女が上擦った声で言った。欲情に濡れた目をして、震え戦く女の乳房を驚掴みにした。

「痛い！止めて。お願い」

女子大生は、蒼白な顔で懇願した。

男が再び彼女の膺を舐め始めた。女は彼女の乳房を口に含み吸っていた。

を動かし始めた。

男が、彼女の白い太腿を持ち上げ、膣口に挿入し、腰



彼女の泣き声が一層大きくなった。数分で男は彼女の中で果てた。乳房を舐めていた女は余韻に浸る男を押し退け、女子大生をうつ伏せにさせ、白い尻の割れ目に顔を押し込みアヌスを激しく舐り始めた。

「ああ。若い娘は最高ね。こんな可愛い娘。久しぶりに抱いたわ。汗流してくるわね」

女は、今口で逝かされたばかりの女子大生から離れた。

「ああ。行って来い？俺は二回戦を始めるよ」

「まだ、殺さないでね。もっと楽しみたいのよ」

「わかっているって。早く行きな」

女は、全裸になり外の露天風呂に向かった。満点の星空だった。湯の温度は適温だった。全身湯に浸かり、星空を楽しんだ。

蛇男が彼女の背後に忍び寄った。岩の湯船から上がるうとした時、首筋に軽い痛みを覚え、すぐに意識を失った。

脱衣場では、男が女子大生をうつ伏せにさせ、拳銃で脅しながら真珠入りの男根でアヌスを犯していた。少し

前までアヌスを舐められていたので何とか受け入れることができた。アヌスを貫かれる激痛と羞恥心のために泣き喚いた。

男はあまりの締め付けに目が眩むほどだった。荒い息を吐きながら腰を激しく前後させ、直腸内に吐き出そうとしたとき、首筋に激痛を覚えた。

振り向くと巨大な蛇の鎌首が、目の前に見えた。それが最後だった。男は神経毒を首筋に注入され、意識を失いそのまま心臓が停止した。

「キヤー！」

女子大生が、蛇男の姿を見て絶叫した。

「騒いでも無駄だ」

蛇男が彼女に話しかけた。

「ど、どうして？あなたは何なの？蛇が話すなんて」

「俺の目を見ろ！」

蛇男の両眼が真っ赤に燃え上がった。その瞬間、彼女の白い裸身が硬直し、一瞬後、力を失い床に倒れ伏した。

蛇男は小屋の外に出て、露天風呂の近くに倒れていた女の裸身に胴体を巻き付き、頭部を口で挟み込んだ。ゆ

つくりと女の裸身を頭部から呑み込んで行く。三十代半ばの女を喰らうのは始めてだったが、脂の載った豊かな肢体を味わいたくなつたのだ。二人に犯される女子大生の痴態を見て、小屋の壁に男根を擦りつけ自慰をしたばかりだった。今は性欲よりも食欲が上回っていた。

桃のように丸く柔らかい乳房を呑み込んだ。思ったとおり、脂の載りは最高だった。豊かな尻は女そのものだった。かなり濃厚な脂身を感じた。

## 第二章 美女の踊り喰い

「美咲なの？」

温泉街から少し外れた国道を女子大生達が乗ったワゴン車が速度を落とし、路肩を歩いている若い女を見かけて声をかけた。

「お早う」

「お早うじゃないわよ！アンタこの二日間どこにいたの？警察まで出動したんだから」

「御免。近くにある親戚のペンションに行つたのよ」

「いいから早く車に乗って！」

「親戚のペンション？何で連絡寄越さなかったのよ」

「だってスマホの電池切れちゃったんだよ」

「そのペンションに充電器無かったの？家電いえでんくらいはあるでしょう？」

「充電器は無かったし、家電はあったけど、あんた達の電話番号覚えていないんだもの」

その後、美咲は女友達に質問攻めにされた。

「今。あんたが無事だったことを警察に連絡したところよ。警察が事情を聴きたいんだって」

「そうだ。ペンションにスマホ忘れちゃった。お願い。すぐその角を曲がったところだから、ちよつと寄ってくれない」

「しようがないわね。本当にすぐなんでしようね？」

彼女達を載せたワゴン車は美咲の案内でペンションに立ち寄ることとなった。

「いらっしやい」

ペンションは、美咲を載せた場所から三キロほどの山奥にあった。白樺林に囲まれた洋風建築のペンションの

前には、三十代前半くらいの夫婦が彼女達を出迎えてくれた。美咲から叔父と叔母だと紹介された夫婦は、叔父の方が身長二メートルほどで雲を突くような大男であった。叔母の方も百八十センチくらいで長身だった。ふたりとも満面の笑顔だった。

「お茶でも飲んで行きませんか？」

ホットパンツからはみ出した白い太腿が叔母の方が彼女達を誘った。美咲の説明では、父の妹で三十二歳ということであった。

「ありがとうございます。でもこれから用事がありますので」

リーダー格の恵理が丁重に断った。これから駐在所に行かなければならないのだ。駐在所にはスマホですぐ向かうと伝えていた。

「いいじゃない。少し休んで行こうよ」

美咲が強引な感じで、他の女達をペンションに連れ込んだ。

全員がペンション内に入ると、ペンションオーナーである美咲の叔父がドアに施錠した。

「どうして鍵をかけるんですか？」

恵理が尋ねても答えは無かった。先ほどまでの笑顔は消え、まるで人形のように無表情だった。

近くに立っていた叔母も同じだった。

「美咲。叔父さん。どうかしちやったの？」

恵理が美咲に声を掛けたが、美咲も同様に無表情で立っているだけだった。

「どうしたのよ。美咲！」

身体を揺すっても同じだった。

「無駄だよ。二人は俺の催眠術にかかっているんだから」  
どこからか、男の野太い声と笑い声が聞こえていた。

「見て！蛇よ。大蛇がいるわ！」

女達が、壁の方を指差し騒ぎ出した。

「俺の餌場にようこそ。もっとも餌はお前達だが。今日は最高の日だ。こんなに美味しそうな獲物達を捕らえることができた」

「冗談は止めて！誰か隠れているんでしょ？」

「俺だけさ。信じないのか？」

声は大蛇である蛇男の方から聞こえていた。蛇男は、女達の方に近付いて行く。

「キャ！」

美咲以外が後方に走り出そうとしたが、出口は施錠されており、行き止まりだった。

「だから、俺だけだと言ったろう？」

蛇男は、恐怖に立ち尽くす恵理の身体に巻き付き、耳元で話しかけた。

恵理は恐怖のあまり、意識を失い蛇男に巻き付かれたまま失神し、床に倒れ込んだ。

残る三人もペンションのオーナー夫婦に掴まった。

「女達を素っ裸にして、風呂で全身を洗い清めるんだ」

蛇男が恵理から離れ、夫婦に命じた。

二人は、言われたとおりに女達の衣服を引き裂き、全裸にして浴室へと引きずって行った。

失神した恵理と催眠術にかかった美咲以外の女達は、声を限りに泣き喚いた。

その夜、ペンションのホールには捕まった女達が、全裸で後ろ手に縛られ、床に転がされていた。

美咲も催眠術を解かれたのか、他の女達同様に嗚咽を

漏らしていた。

蛇男が彼女達の間をゆつくりと這い回っていた。

壁際にペンションオーナの新藤太一と麗子が、無表情な顔で立っていた。ピクリとも動かずまるで彫像のようだ。

「麗子。女を犯せ」

女達から離れ、テーブルの上に蝮局とくろくを巻いた蛇男が、ペンションオーナ夫婦の妻である麗子に命じた。長身の麗子は、女達の中でスレンダーではあるが、乳房と尻が豊かな花梨かりんを軽々と抱き上げた。ホール内に造られた仮設ステージに彼女を運び、床に横たえ、白い太腿を大きく広げ、膣口を舐り始めた。

花梨の泣き声がペンション内に響いた。彼女にクンニをしながら、着ていた衣服を脱ぎ始めた。

麗子は三十二歳になるが、贅肉はほとんどなく、引き締まった身体に豊かな乳房と尻を持っていた。股間には図太い張形が装着されていた。それをクンニで濡れた膣口に挿入した。花梨の白い背筋が跳ね上がった。彼女の乳房を手でこねくり回しながら、激しく腰を動かした。

彼女の泣き声が一層激しくなった。やがて泣き声は喘ぎ声に変わった。麗子の腰を自分の股間に押し付けるようにして絶頂に達した。

麗子は逝ったばかりの花梨をうつ伏せにして、今度はアヌスを舐り始めた。頃合いを見て、張形をアヌスに突きとおした。彼女はアヌスを犯される苦痛にもがき苦しんだ。同性による容赦の無いレイプだった。

「お前も犯って来い」

蛇男はテーブルの上に置かれた赤ワインを直接飲みながら、大男の新藤に命じた。新藤は、近くに転がされていた美咲の足首を無造作な感じで掴んで、ステージに引きずって行く。

美咲は、恐怖のあまり蒼白な表情でただ震えるばかりだった。美咲をステージ上でうつ伏せに横たえた。震え戦く豊かな白い尻を両手で割り、アヌスを貪り始めた。それは信じられない程、執拗な舐りだった。美咲のアヌスと膣口は意に反して濡れ始めていた。

新藤がズボンとパンツを脱いだ。巨大な男根が天を突いていた。美咲が顔を上げ、新藤の方を向いた。大きな瞳が見開かれた。見たことも無い巨根だった。

新藤は、彼女の腰を掴み、巨根を膣口に押し当てた。

「止めて！そんな入れないで！」

泣き叫ぶ美咲にお構いなしで、巨根を突き入れた。美咲の小さな膣口が大きく膨れ上がっていた。

激しいクンニを受け濡れていたのも、裂けることは無かった。メリメリと言った感じでめり込んでいく。

「ギャー！」

美咲は白い背筋を仰げ反らせ絶叫した。新藤は激しく腰を前後させた。美咲の白い裸身が木の葉のように揺れ動いていた。

「腹空いた。麗子。花梨を連れて来い」

麗子は、張形で三度目の絶頂を味合わされた花梨を抱き上げて蛇男の元に連れてきた。

蛇男が、テーブルから下りて床に頭部を付け大口を開

けた。

麗子はぐったりとして視線が定まらない花梨の頭部を蛇男の口内に押し込んだ。

「嫌！食べないで！」

蛇男の口内から花梨の悲痛な叫び声が聞こえてきた。花梨が恐怖のあまり失禁した。麗子が無表情な顔で花梨の股間に顔を付けて小水を飲み込んだ。既に花梨の豊かな白い乳房が蛇男の口内に消えていた。

第三章 新たなる獲物達 へと続く